

令和元年6月11日現在

機関番号：14401

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K16697

研究課題名（和文）20世紀のアメリカ文学における日本の民話の受容と意義

研究課題名（英文）The Reception and the Role of Japanese Folktales in the 20th-Century American Literature.

研究代表者

CARDI LUCIANA (Cardi, Luciana)

大阪大学・言語文化研究科（言語社会専攻、日本語・日本文化専攻）・特任講師

研究者番号：00725632

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、20世紀の初頭から現在に至るまでのアメリカ作家やアジア系アメリカ作家の作品における日本や東アジアの民話の影響と意義を明らかにした。特に日本のおとぎ話に登場するトリックスターの狐に焦点を当て、東アジアの民話からインスピレーションを受けたアメリカ文学や映画におけるこのトリックスターの役割を証明した。時代の流れとともに変化してきた日米関係、フェミニズム運動、アジア系マイノリティの文学的動向等を背景として、本研究では様々な作品の比較分析を通して、狐に関わる日本の民話の受容とその改作の独特な役割を解明することができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

東アジアの文学的な境界を越え、アメリカ文学に新たな物語として改作されてきた日本の民話の受容と意義を解明することによって、本研究の成果が日米比較文学研究と国際的なおとぎ話研究の発展に寄与できると確信している。現在、国際的なおとぎ話研究において伝統的な民話やおとぎ話の現代的な改作に関する議論が盛んであるが、西洋中心的な傾向がみられる。そのため、新たな方法論によって日本のおとぎ話の文化横断的な意義を考察する本研究は、現代のグローバル社会で発展しているおとぎ話と民話の比較研究に貢献するものである。

研究成果の概要（英文）：This research has demonstrated the impact of Japanese and East Asian folktales on the imaginary of American and Asian American writers from the beginning of the 20th century to contemporary times. By focusing on the figure of the shape-shifting fox trickster, I have investigated its function both in Japanese literary texts and in American literary and filmic adaptations. In doing so, I was able to clarify the changing role of Japanese folktales in relation to the cultural and literary backgrounds against which they have been produced and then adapted over time. In particular, I have investigated their relationship with issues of gender, ethnic identity, and race in the works of John Luther Long, Winnifred Eaton, Kij Johnson, Hiromi Goto, Larissa Lai, and other writers. By examining the role of Japanese and East-Asian folktales in a cross-cultural context, my study has contributed to filling a research gap in the fields of comparative literature and fairy-tale studies.

研究分野：比較文学、おとぎ話研究

キーワード：日本の民話の受容 おとぎ話研究 比較文学 日本文学 20世紀のアメリカ文学 トリックスターの狐
ジェンダー アジア系アメリカ文学

1. 研究開始当初の背景

現在、日本の民話やおとぎ話に登場する妖怪は、SF 作品やアニメによって米国で普及し、現代アメリカ文学や大衆文化の中で次第に再創造される傾向が現れている。そのため、日本の民話と現代の大衆文化・現代文学の関係がアメリカ人研究者の注目を集め、様々な学術専門書の課題となった。日本と東アジアの民話に登場する化け物の中で、狐は多くの日本人作家や映画監督によって頻りに描写され、アメリカでもジャポニズムの時代から現代までの文学作品や映画の中で登場してきた。狐の嫁入りのモチーフを中心とするエレン・ステイバーの『The Fox Wife』(1996年)、『今昔物語』を下地にするキジ・ジョンソンの『The Fox Woman』(2000年)、ノラ・オクジャ・ケラーの『Fox Girl』(2002年)などの小説はその傾向を表している。その傾向に伴って、東アジア研究者や日本文化の愛好者の中で、狐に関わる民話とその民話の現代的な翻案に対する関心が高まってきたが、その課題を論考する論文はまだ少ない。また、その論文は限定された文学作品に焦点を当てて考察するので、全体的な傾向を見落とし、あまり深みがない。狐を中心とする日本や東アジアの民話が19世紀末のアメリカ人作家に知られたきっかけ、および現代まで米国で普及した現象に関する言及も不十分である。

2. 研究の目的

本研究は狐が登場する日本や東アジアの民話に注目し、20世紀初頭から現在までのアメリカ文学においてこの民話の影響を受けた作品に焦点を当てたものである。様々な文学作品の比較調査により、時代の流れとともに変化してきた日米関係、フェミニズム運動、アジア系マイノリティの文学的動向等を背景として、狐に関わる民話の受容とその独特な役割を解明することを目的とした。特に、申請時に本研究の主な目的は以下の通りであった。

(1) 20世紀前半のアメリカ文学を研究対象とし、ジャポニズム、人類混血に対する偏見、黄禍論、オリエンタリズムに影響された文化的な背景を参照しつつ、狐憑きに関わる民話が欧米で普及した現象の原因の解明を目指した。また、ジョン・ルーサー・ロングやウィニフレッド・イトンの小説に焦点を当て、その小説の中に登場する〈女に化けるアジアの狐〉と20世紀初頭のアメリカの〈新しい女〉(New Woman)の描写の関係を実証することを目指した。

(2) 20世紀後半のアメリカ文学を研究対象とし、米国の戦後社会における〈モデル・マイノリティ〉としての日系アメリカ人のイメージと60~70年代のフェミニズム運動の影響を確認しつつ、狐に関わる民話の受容を検討することを目的とした。エレン・ステイバーやキジ・ジョンソンの作品に焦点を当て、ジュディス・バトラーが指摘したパフォーマンスとしてのジェンダー構築がその小説の中で女に〈変身〉する狐の描写に及ぼした影響を解明することを目指した。

(3) 1990~2000年代アジア系アメリカ文学を研究対象とし、ノラ・オクジャ・ケラーの『Fox Girl』とラリッサ・ライの『When Fox is a Thousand』の中で多様な文化間の媒介者として描かれている〈アジアの狐〉の意義を分析し、特に様々な形に変身する狐の描写とアジア系アメリカ人のアイデンティティ問題の関係を明らかにすることを目指した。

(4) 日本学術振興会の科研費の援助を受けながら行ってきた研究をまとめ、20世紀のアメリカ文学における日本の民話の受容と意義に関する学術専門書の執筆を進めることを目指した。

現在、比較文学やおとぎ話研究(fairy-tale studies)などの様々な研究分野で日本の伝統的なおとぎ話やその現代的な改作に関する関心が高まっている。それにも関わらず、日本のおとぎ話が欧米文学の中で新しい物語として改作されてきた現象、またその改作が持っている意義に関する研究はほとんどされていなかったため、本研究の目的はその研究上の空白を埋めて、国際的なおとぎ話研究や日米比較文学の発展に貢献することであった。

3. 研究の方法

(1) 日本の民話やおとぎ話からインスピレーションを得た英米文学の作品、及びその作品に影響を与えた文学的・社会的な背景に関する資料を集めるため、以下の通り、国内外の図書館や研究施設で幅広く調査を行った。

- 東京都の国立国会図書館を訪れ、19世紀末から20世紀初頭に至るまでの日本を舞台とした小説を書いた、または日本の民話の編集を行ったアリス・メイベル・ベーコン、ジョン・ルーサー・ロング、メアリー・マクニール・フェノロサ、フランシズ・リトル、スーザン・バラルド、エドワード・グレイなどのアメリカ人作家に関わる資料および学術論文を収集

し、徹底的に分析した。

- ジョン・ルーサー・ロングに関する一次資料を収集するため、テキサス大学オースティン校ハリー・ランサム・センター（Harry Ransom Center）を訪れた。同センターが所蔵するロングの未発表の作品や手紙の中で日本と関係のあるものを探し、多数の日本民話のアダプテーションを発見し、その分析を行った。
- アメリカ合衆国カンザス州ローレンス市に本部を置くカンザス大学のケネス・スペンサー研究図書館(Kenneth Spencer Research Library)を訪れ、SF小説家コードウェイナー・スミス作品における東アジアの民話の影響について調査した。
- アメリカ合衆国のカンザス大学を訪れ、この大学の教授であるSF女性作家キジ・ジョンソン(Kij Johnson)をインタビューした。ジョンソン氏は『今昔物語』に基づいている『The Fox Woman』の著者で、自分の作品における日本の民話やおとぎ話の役割について解説した。このインタビューによって、ジョンソン氏の作品を着想させた日本のおとぎ話の意義に関する貴重な情報を得ることができた。
- ロンドンの大英図書館のアーカイブでアンジェラ・カーターの日記やノートなどを調べて、カーターの作品における日本の民話の影響に関わる資料を発見した。

(2) 民話・おとぎ話研究の新たな動向に着目する学術評論、及び20世紀のアメリカ文学や映画における日本のイメージや日本民話の受容に関する書籍を収集し、その分析によって研究を発展させ、研究課題に関する適切な理論的なアプローチを行った。

(3) 国内のみではなく、海外でも様々な学会で研究結果を発表し、国際的な論議を推進した。また、報告者の研究課題に関して研究者間で意見を交換しつつ、多角的に研究課題の検討を進めた。

(4) 神奈川大学で、同大学の村井まや子教授と共に共催者として国際学会「Re-Orienting the Fairy Tale: Contemporary Fairy-Tale Adaptations across Cultures」を開催することによって、おとぎ話の現代的な翻案に関する研究に携わる学者のネットワークを構築し、研究課題に関する理解を深めることができた。またグローバル時代の現代社会において、伝統的なおとぎ話やそのおとぎ話の現代的なアダプテーションが担う意義に関する国際的な論議を促進させた。

4. 研究成果

補助期間を通じて、複数回の国内外出張で、東京都の国立国会図書館、テキサス大学のハリー・ランサム・センター、カンザス大学のケネス・スペンサー研究図書館、ロンドンの大英図書館のアーカイブ研究を行い、本研究の課題に関わる新しい一次資料を発見した。また、収集した資料を分析し、国際学会や論文で研究成果の発表を行った。

(1) **平成27年度**は20世紀後半のアメリカ文学における日本民話の改作に関する発表を二件行った。岡山大学で開催された国際ワークショップ「Japan in the World and the World in Japan: a Methodological Approach」では、アメリカ文学と日本文学におけるおとぎ話の文化横断的な改作について考察し、その改作への理論的なアプローチについて論じた。アメリカ合衆国オースティン市で行われた現代言語協会「MLA (Modern Language Association) 国際学会」においては、現代アメリカ文学作家キジ・ジョンソンによる日本民話の改作とジュディス・バトラーが指摘したジェンダー・パフォーマンス（パフォーマンスとしてのジェンダー構築）の関連性を明らかにした。日本のおとぎ話を新たな物語として改作することにより、ジョンソンは伝統的なおとぎ話によって構築されてきた女性観を覆し、女に変身するトリックスターの狐を通してジェンダー・パフォーマンスとその問題について検討している。この際には、発表の対象となった小説『The Fox Woman』(2000年)を執筆したジョンソン氏が私の発表内容に興味を持たれ、連絡をくれた。作者本人と直接、本研究に関わる意見交換をするという貴重な機会を持たれたことで、研究課題に関する理解をさらに深めることができた。

(2) 幅広く現代文学におけるおとぎ話や民話の意義について検討し、アメリカで出版された「The Greenwood Encyclopedia of Folktale and Fairy Tales」に川端康成と安房直子の作品におけるおとぎ話の独特な意義に関する二つの論文を掲載した。

(3) 国際学会「Re-Orienting the Fairy Tale: Contemporary Fairy-Tale Adaptations across Cultures」(おとぎ話のリオリエンテーション 文化横断的アダプテーションのいま)を共催者として実施することにより、欧米、アジアをはじめ世界各国の関連分野の専門家のネットワークを構築し、現代文学におけるおとぎ話と民話のアダプテーションと受容について討議する機会を設けた。また、意見交換を通して本研究課題に関する知見と情報を得て、さらに研究を深める推進力にした。

(4) 出産および育児休業によって研究を中断した後、平成 29 年度は、青山学院大学で開催された国際ワークショップ『Japan Pop Goes Global: Japanese Pop Culture on Aesthetics and Creativity』で口頭発表「Beyond the Traditional Fairy-Tale Canon: The Japanese Fox Trickster in American Graphic Novels」を行った。この際、近年はアメリカで出版されたグラフィックノベルのシリーズに焦点を当て、Neil Gaiman の『The Sandman』(1989~2015 年)と Bill Willingham の『Fairest』(2012~2015 年)における日本のおとぎ話の受容と意義について考察した。このグラフィックノベルはおとぎ話研究者 Cristina Bacchilega 氏(2013 年)が指摘していた傾向 おとぎ話の現代的な改作における西洋と非西欧のモチーフの混合を反映している。報告者は両方のシリーズが日本のおとぎ話や欧米の童話・神話を混合させることにより、西洋童話の伝統的な規範を歪めることを明らかにした。また、Willingham と Gaiman による狐の描写は日本に関わる欧米の固定概念を反映することを解明した。特に、『Fairest』では日本のおとぎ話に登場する狐は西洋のゴシック小説の女吸血鬼として描かれているため、この作品は 20 世紀初頭のアメリカ文学における日本のおとぎ話の改作と関連していることを明らかにした(研究成果)。

(5) 平成 29 年度末にテキサス大学のハリー・ランサム・センターやカンザス大学のスペンサー図書館を訪れ、新しい資料を発見した。その資料の分析によって、本研究が完成した後出版する予定である学術専門書の第二章「The Flip Side of Madame Butterfly: From Oriental Vampires to American Ladies」を完成させることができた。この章では、1900 年代から 1920 年代までのアメリカ文学に焦点を当て、ジョン・ルーサー・ロングやウィニフレッド・イートン(オノト・ワタンナ)の小説および、ロイド・イングラハムによるジョン・ルーサー・ロング作品の映画化における日本の民話の描写と意義について考察した。特に、日本の民話からインスピレーションを受けた作品におけるジャポニズム、人類混血に対する偏見、黄禍論、オリエンタリズムの影響を検証した。その作品の中に登場する「女に化けるアジアの狐」と 20 世紀初頭のアメリカの「新しい女」の描写と 19 世紀後半から英米文学の作品の中で頻繁に登場する吸血鬼の姿の関連性を実証することができた。

(6) アメリカ合衆国のカンザス大学を訪れ、この大学の教授である SF 女性作家キジ・ジョンソンをインタビューした。このインタビューによって、ジョンソン氏の作品に着想を与えた日本のおとぎ話の意義に関する貴重な情報を得て、MLA 国際学会の発表に基づいた論文「Shifting Performances of Femininity in Kij Johnson's Retelling of Konjaku monogatari」を執筆した。この論文は学術書『The Transformed Body in Contemporary Japanese Society and Fiction』の編集者に依頼されたもので、この学術書の章として刊行される予定である。

(7) その後、ヨーロッパへ移動し、ロンドンの大英図書館のアーカイブでアンジェラ・カーターの作品における日本の民話の影響に関わる資料を発見した。20 世紀後半の米英文学における日本民話の受容を深く理解するため、西洋の童話のみならず、日本の民話からもインスピレーションを受け、文学的および文化的な境界を横断したカーターに関する検討が欠かせないと考えられる。そのため、発見した資料の分析に基づいた論文を執筆し、翌年度に開催された学会でそれを公開した。

(8) 平成 30 年度は英国のイースト・アングリア大学で開催された国際シンポジウム「Angela Carter and Japan」において研究成果に関する口頭発表「The Role of Japanese Folktales in Angela Carter's Literary Production」を行い、好評を得た。本発表ではカーターの作品『Fireworks』、『Love』、『The Infernal Desire Machines of Doctor Hoffman』に焦点を当て、この作品が描写している性アイデンティティの構築の問題とカーターによる日本のおとぎ話の改作の関連性を解明した。その発表に基づいた論文は 2020 年にイギリスの学術雑誌「Contemporary Women's Writing」の特集号「Angela Carter and Japan」に寄稿される予定である。

(9) 現代アジア系アメリカ文学における東アジアの民話やおとぎ話の受容に関する研究調査を推進し、日本比較文学会の全国大会で行った口頭発表「East-Asian Folktales in Hiromi Goto's and Nora Okja Keller's Fiction」においてその研究の成果を公開した。この発表では、Hiromi Goto の「Foxwife」と Nora Okja Keller の「Fox Girl」に焦点を当て、現代アジア系アメリカ人やアジア系カナダ人作家が東アジアの民話を改作することによってジェンダーやアイデンティティの問題について考察している傾向があると解明した。Goto は日本の伝統的なモチーフ「狐の嫁入り」からインスピレーションを受け、狐動物と人間の関係、および女性同士の関係を物語の中心としている。一方、Keller は狐に関わる韓国の昔話を改作し、1960 年代の韓国とハワイにおいて人類混血に対する偏見を描写している。両方の作品では、多様な文化間の媒介者として描かれている狐を通じて、女性の主人公はアジア系アメリカ人、及び女性としての自分のアイデンティティを構築する社会的な規範に反抗することについて論じた。

(10) 学術専門書『Re-Orienting the Fairy Tale: Contemporary Adaptations across Cultures』がアメリカの出版社 Wayne State University Press の公式な承認を得て、2020 年に出版される予定である。報告者は村井まや子氏と共にこの学術専門書を編集し、序論を執筆した。本書によって、文化横断的な視点から現代文化におけるおとぎ話と民話のアダプテーションの比較研究を発展させ、国際的なおとぎ話研究に多大な貢献を果たすことを確信している。

以上の研究活動により、アメリカ文学における日本の民話の受容と意義について、多角的な観点から考察することができたが、この3年間で新たに発見した資料は今後の研究の土台となる。今後は、本研究の遂行において得られた研究成果を集約したうえで、さらなる研究を行い、総括的な論考の構築を目指している。また、学術専門書『From Asian Foxes to American Women: Adaptations of Japanese and East-Asian Folktales in American Literature』に関しては平成30年までに完成する予定だったが、妊娠に伴う健康上の事情、出産、育児休業、そしてこの3年間に予想以上の資料を発見し、その資料の整理と分析に時間が必要だったことにより、出版が3年ほど(令和4年まで)延期される予定である。学術専門書の完成は今後の研究の課題になり、この3年間で発見した資料に関する総括的な論考を行うために研究を継続する必要があると考えられる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計3件)

Cardi Luciana, "Using Gianni Rodari's The Grammar of Fantasy to Teach Creative Writing to Japanese Learners of Italian as a Foreign Language". *Frontier of Foreign Language Education* 2. 査読有 Osaka: Osaka University Press. 2019. 109-125.

Cardi Luciana, "Kawabata Yasunari". Duggan, Anne E. and Donald Haase, eds. *Folktales and Fairy Tales: Traditions and Texts from around the World*. Second revised and expanded edition of The Greenwood Encyclopedia of Folktale and Fairy Tales. 査読有 Ed. Donald Haase. 4 vols. Santa Barbara: ABC-CLIO, 2016. 538-539.

Cardi Luciana, "Awa Naoko". Duggan, Anne E. and Donald Haase, eds. *Folktales and Fairy Tales: Traditions and Texts from around the World*. Second revised and expanded edition of The Greenwood Encyclopedia of Folktale and Fairy Tales. 査読有 Ed. Donald Haase. 4 vols. Santa Barbara: ABC-CLIO, 2016. 90-91.

〔学会発表〕(計6件)

Cardi Luciana, 「The Role of Japanese Folktales in Angela Carter's Literary Production」 「Angela Carter and Japan」国際シンポジウム(於: イースト・アングリア大学、ノリッチ、英国) 2018年6月30日

Cardi Luciana, 「The Role of East-Asian Folktales in Hiromi Goto's and Nora Okja Keller's Fiction」日本比較文学会第80回全国大会(於: 日本大学、東京、日本) 2018年6月9日

Cardi Luciana, 「Beyond the Traditional Fairy-Tale Canon: The Japanese Fox Trickster in American Graphic Novels」(アメリカのグラフィックノベルにおけるキツネのトリックスター) 青山学院大学の国際ワークショップ『Japan Pop Goes Global: Japanese Pop Culture on Aesthetics and Creativity』(於: 青山学院大学、日本) 2017年11月25日

Cardi Luciana, 「Cross-Cultural Folktales: Japanese "Fox Wives" in Contemporary American Narratives」(民話に関する文化横断的研究 現代アメリカ文学における狐女房のアダプテーション) 神奈川大学の国際学会『Re-Orienting the Fairy Tale: Contemporary Fairy-Tale Adaptations Across Cultures』(於: 神奈川大学、日本) 2017年3月30日

Cardi Luciana, 「Shifting Performances of Femininity in Kij Johnson's Retelling of Japanese Tales」 MLA (Modern Language Association) 学会第132回全国大会(於: オースティン、テキサス州、アメリカ合衆国) 2016年1月8日

Cardi Luciana, 「Tentative Approaches and Challenges: Teaching Comparative Literature in Japan」国際学会『Japan in the World and the World in Japan: a Methodological Approach』(於: 青山大学、日本) 2015年6月27日

〔図書〕(計1件)

Murai Mayako、Cardi Luciana (編・著者) Re-Orienting the Fairy Tale: Contemporary Adaptations across Cultures. Detroit: Wayne State University Press (2020年発行予定)。

6. 研究組織

(1)研究代表者

氏名：カルディ・ルチャーナ

ローマ字氏名：CARDI, Luciana

所属研究機関名：大阪大学

部局名：大学院言語文化研究科

職名：特任講師

研究者番号(8桁): 00725632

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。